

【 6 】

氏 名	野 辺 地 正 之 の べ ち ま さ ゆ き
学 位 の 種 類	教 育 学 博 士
学 位 記 番 号	論 教 博 第 2 号
学 位 授 与 の 日 付	昭 和 41 年 9 月 27 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	自 我 の 変 容 に 関 す る 心 理 学 的 研 究

論文調査委員 (主査) 教授 佐藤幸治 教授 下程勇吉 教授 倉石精一

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は序論、五章より成る本論、並びに結語から成立っている。序論においては従来の主体的自我 (EGO) と客体的自己 (SELF) の簡単な二分が多くの混乱を生じたことを批判し、自我をできるだけ人間の現実の行動から操作的に規定すべきことを論じて、本論文の立場を明らかにしている。

第一章においては、先ず自我の変容性と共に、その同一性保持の傾向に注意し、自我の変容性と個体の適応との関連を考察し、自我の変容の条件、及び自我の拡大、強化、弱化、崩壊等の変容の様態について、多くの資料を蒐集して、分析を進めている。

第二章では、個体の発達が自我をどのように形成させ、また発達の過程がそれをどのように変容させるかを、乳幼児期から青年期にわたって考察している。

第三章では、特に脅威的事態における自我の変容について、従来数多くなされた恐怖、不安の研究の資料を広く蒐集し、これを組織づけようとした。最後に、脅威処理に対するカウンセリングの役割について論じている。

第四章においては、人格に時に根本的な変化を与える宗教的体験をとりあげ、その人格統合に与える効果、回心の過程とその効果、さらに神秘的体験における主客合一感、忘我の現象、禅の体験における自我の変容、真実の自我の自覚等にわたって考察し、さらに薬剤、催眠等による人為的な擬似状態と比較検討している。

第五章においては、宗教的体験にも通ずるところのある強迫観念症的体験をとり、その現れ方を中学生より大学生にわたって調査した結果を論じ、さらに暗示効果における宗教的グループと非宗教的グループとの比較実験について報告している。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

自我に対する心理学的関心の再興は、最近の心理学の注目すべき特色であるが、従来の研究がなお哲学

的考察に傾いて十分な心理学的資料を欠き、或は社会的側面等の一面的考察に傾き易かったのに対して、自我、特に自我の変容を中心として広く心理学的資料を蒐集、整理して、体系化への試みを進めた点は本論文の第一の特色である。さらに筆者のキリスト教的素養を背景としているが、自我の最も深い根源にふれるものとして宗教的体験をとりあげ、禪等にも視野を広げながら、そこにおける自我の様態を解明しようとした点は、本論文の第二の特色である。ここに目標をおきつつ、さらに自我に対する脅威の問題をとりあげて広く研究を涉獵し、その基盤として、自我の発達、並びに一般の変容の力学をも広く概観して、自我の心理学的研究の体系化を試みている。最後の章の強迫観念症的体験の調査研究も、青年期における宗教的葛藤並びに転回に連なるものとして自我の力学の解明上重要な位置をもつものであって、実証的な面から本論を補っている。序論における主体的自我と客体的自己の峻別に対する批判も、心理学的自我経験の現れ方を広く深く観察した結果と見られる。

宗教的生活並びに体験における自我の問題は決して安易な問題でなく、さらに深い体験と研究の立場としてもドイツ系統の実存心理学的なものなどを加えて、一段深くこれを掘り下げ、一貫した理論を探索する必要があるとしても、本論文は筆者の長年にわたる研究成果に基くものであり、教育心理学及び臨床心理学の中核的な領域に対する有力な寄与たるを失わない。

よって本論文は教育学博士の学位論文として価値あるものと認める。